The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	英語色彩語を含む強意直喩表現の分析 ： 文脈と媒体の関係
Author(s)	竹森, ありさ
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 75-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85064
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

英語色彩語を含む強意直喩表現の分析 ―文脈と媒体の関係―

竹森ありさ

1. はじめに

色彩語は比喩義を持ち、その認知プロセスについては様々な議論がされている。英語の色彩語メタファーには Adj + N(white lie) ,V + Adj (feel blue) など様々な形式があり、形式を問わない包括的な研究もあれば Adj + N のみを扱ったものなども存在する。

本稿では、色彩語比喩表現の中でも、強意直喩表現を扱う。強意直喩は、概ね [N1 V (as) adj. as N2.]という形式をもっており、"Her cheek is as red as rose." などがこの例にあたる。形容詞が示す性質の程度を高める表現である。色彩語メタファーには、先述の"white lie"、"feel blue"など、感情や嘘など本来物理的色彩をもたないものが見られるが、これらに比べて強意直喩は視覚的なつながりがある場合が多い。また、メタファーは様々な形式がある一方、強意直喩はシンプルでありコーパスで扱いやすいと言える。

色彩語を含む強意直喩表現は、*red as rose, red as fire, red as blood* などのように N2 のスロットに様々な名詞が入りうる。しかしこれらは全て「真っ赤」という意味を表す。N2 が文脈的にどのように違うのかについて、N1 と文脈の結びつきにより N2 に選択される語彙が決定されているという考えに立った上で、使用傾向を明らかにするのが本研究の目的である。

2 節では先行研究を概観し、3 節で研究方法を説明する。4 節でコーパスの強意直喩表現のデータを示し、5 節で議論、6 節でまとめと課題を述べる。

2. 先行研究

強意直喩表現については 2.1 節と 2.2 節、色彩語については 2.3 節で取り上げ、2.4 節で問題点をまとめる。

2.1 Svartengren (1918), Moon (2008)による強意直喩表現の研究

強意直喩表現の研究は、Svartengren (1918)と Moon (2008)を取り上げる。

Svartengren (1918)は、イギリス英語で見られる 1001 の強意的直喩表現を、形容詞の意味ごとに分類して紹介し、強意直喩表現の主要な特徴をまとめている。形容詞と N2 に注目して分析しており、それぞれの強意直喩の N1 が必ず明記されているわけではない。(1) は形状に関し形容詞 straight の意味をもつ直喩として紹介されている。

(1)a. The highway soon became as straight as a bowstring.
b. He stood up immediately, as straight as a fiddlestring.
c. As straight as a thread.
d. Straight as a surveyor's line.
e. He usually moves to his quarry as straight as a falcon. (Svartengren 1918: 275)

(1a, b)は N1 が示されているが、(1c, d)は何について"straight" なのかが不明である。そして、(1e) は "falcon"の素早い飛翔という特徴を踏まえると、"he"の姿勢の真っ直ぐさについて述べているものではないので、形状に関し"straight"だと断言できるかは疑問が残る。強意直喩の N1 や前後の文脈を考慮すると、紹介されている例に含まれる形容詞の意味解釈に変更が生じ、分類も変わる可能性がある。

続いて、Moon (2008)は、コーパス Bank of English などを中心に用いた *as*-similes の分布についての調査である。小説において強意直喩が頻繁に使用されている点を指摘し、その理由を、描写説明がメタファーよりわかりやすく伝わるためで、シミリーを選ぶのは読者に配慮した結果であると考察している (*ibid.* 30)。確かに作家の配慮は関係していると思われるが、*as*-similes は一場面に複数現れる傾向がある。これは作家が同じ形式の表現を用いて対比などのレトリックを利用する意図が考えられる (レトリックについては 5 節で詳述する)。一つの表現だけでなく、複数の強意直喩表現が相互に作用する可能性を Moon (2008)は見落としている。

2.3 小原(2016) による英語色彩語のコーパスでの分布の調査

小原(2016)は、Wierzbicka (1990)の「色彩の概念は人間の周りにある自然物(sky, grass, leaf, night, blood, fire, flame, sun など) に根差している」という主張に対し、この自然物の名詞と色彩語がどれほど多く共起するのかを検証した。色彩語(Adj.) + Noun という形式で BNC を検索した結果、*yellow, red* と関連していると言われている sun, fire, flame についてはそれほど共起頻度が高くなかった。表 1 は sun, fire, flame それぞれを修飾する色彩語をまとめたものである。

表 1 (小原(2016)より)

sun を形容する色彩語			fire を形容する色彩語			flame を形容する色彩語		
順位	色彩語	数	順位	色彩語	数	順位	色彩語	数
13	GOLDEN	11	16	BLACK[1]	20	2	BLUE	26
16	WHITE	10	28	BLUE	13	5	ORANGE	13
24	YELLOW	7	31	RED	11	7	YELLOW	12
26	RED	6	36	WHITE	9	10	RED	9
			43	GREEN	7	20	GREEN	5

Blue + fire/ flame で引用されている例には、”Damian snatched the phone from her hand, eyes like blue fire.” (*ibid.*60) “His eyes were like blue flames, she thought, drawing her irresistibly into his fire.” (*ibid.*61) などがあり、目の虹彩の色と、感情が関わることによって意外性のある共起が生じると言えるが、小原(2016)は色彩語のみに注目している。色彩語の周辺の語も重要な情報を含んでいるので分析する価値があるだろう。

2.4 先行研究の問題点

ここまで強意直喩表現と色彩語の先行研究を概観してきた。形容詞と vehicle[2]、色彩語と名詞という形式に注目した分析が中心であり、強意直喩表現の使用傾向の分析は、N1 や文脈を考慮したものではない。N2 の相違点を明らかにするためには、N1 や文脈も観察する必要がある。

3. 研究方法

本節では、N1 と N2 の関係を分析するためにどのように研究を行うかを説明する。

本研究で扱う色彩語は *white, black, red, blue, green, yellow* の 6 色である。Corpus of Contemporary English (COCA)のコロケーション検索で、*white, black, red, blue, green, yellow* のそれぞれに最もよく使用される N2 を 20 ずつ集める。次に、個々の N2 を色彩語ごとに、「身体」「着物・装身具」「自然物」「人工物」「心理・象徴」の 5 つに分類する。この分類は、N2 の言葉がどのように使われるか傾向を見定めるために行う。続いて、強意的直喩表現が肯定的意味、否定的意味のどちらで使用されているか判断する。 “Their hearts were as evil and black as coal.” などのように色彩語以外の形容詞が共起する例があるので、このような語句と、前文脈・後文脈中の表現を参考にする。ただし、強意直喩表現が文学作品に多用される点を考慮すると、肯定や否定をはっきりと示さない表現がある可能性に注意しなければならない。

上述の 6 色は、Biggam (2015) の ModE 基本色彩語 11 色(*white, black, red, yellow, green, gray, blue, brown, purple, orange, pink*) のうちの 6 色である。Biggam (2015) は英語における基本色彩語の発展を、OE, ME, ModE ごとに示した。

[1] この BLACK は固有名詞の一部なので色彩語の例からは外すべきと述べている(小原 2016: 60)。

[2] 本稿では Richards (1936)に倣い喩えられる言葉を tenor、喩える言葉を vehicle と呼ぶ。タイトルの「媒体」は vehicle の訳語である。

(2) OE : hwit, blæc/(sweart) , read, geolu, grene, græg
ME : whit, blak, red, yelwe, grene, grei, bleu, brown
ModE: white, black, red, yellow, green, gray, blue, brown, purple, orange, pink

(*ibid*.129)

white と *black* は OE では無彩色だけでなく明るい色と暗い色をも包含していた基本的な語である(*ibid*.122)。 *red, blue, green, yellow* は光と色の三原色を構成し、これら 6 色は色知覚的に重要な語である。残りの 5 色に関しては、元々色そのものではなく服や植物などを指しており、本研究で扱う 6 色に比べ基本色彩語になるまでに時間がかかっている(*ibid*.130)。また、これら 5 色を定義する際、基本色彩語を 2 つ以上掛け合わせた色であると説明される。

「身体」「着物・装身具」「自然物」「人工物」「心理・象徴」という 5 つのカテゴリーは、上村(1999) にならったものである。この研究は芥川龍之介作品での 7 つの色彩表現(白、黒、赤、青、黄、紫、緑)について、色彩の使用傾向と意味を分析したものである。上村(1999) は色彩表現の向けられている対象を 5 つのカテゴリーに分類し、この対象別分類に基づいて、 色彩がどのような意味を表しているかを考察した。

この対象別分類は、分類が細かすぎず、強意直喩の vehicle の性質を簡潔に示すことができる。また、強意直喩は小説に多く現れる傾向があり、この対象別分類は文学作品に適用されたものなので、本研究にも合うと考え採用した。

次節では、色彩直喩の N2 を提示し、N1 と文脈を確かめながら用例を見ていく。

4. データ

本節では COCA から得られたデータを示し、用例を観察する。4.1 節では 6 色それぞれの N2 を紹介し、4.2 節では、肯定的・否定的使用が顕著な強意直喩表現の例を取り上げる。

4.1 N2 のリスト

COCA で色彩語 + *as* (e.g., white as) を右 5 語に設定してコロケーション検索した結果、*white, black, red, blue, green, yellow* それぞれの N2 に入る語彙の上位 20 項目は表 2 の通りであった[3][4]。名詞の左の数字は COCA での順位、右の数字は頻度である。この表 2 には強意直喩表現ではない例は含まれていない。また、20 位以内に単数形と複数形の両方が含まれている場合は、それらをまとめて一つの項目としている。表 2 では、単複のどちらかでより頻度の高い方が、頻度の低い形を包含している(例 : *white* の SHEET は 100 例あり、単数形は 95 例、複数形は 5 例見られた)。以上の理由から、COCA の順位と頻度は必ずしも一致しない。

これらの N2 の対象別分類を行なった結果、vehicle の語彙には以下の傾向が見られた。

・「着物・装身具」は極めて少ない。服の色は様々であるため N2 に使われづらいと考えられる。
・「心理・象徴」に分類される語は *black* に最も多く見られた(death, soul, hell, ace of spade, sin)。
・「自然物」に分類できた N2 が最も多い。sky, sun, cloud など空に関係するものが特に多い。
・全体的な傾向として、色彩語と N2 を比べると色調の点で意外性が低く、「赤は血の色」「緑は植物の色」などの連想が強く働いているのが分かる。しかし個々の vehicle がもつ色と、ある色彩語の色調とを同じだと捉えていたとしても、つまり、ruby, rose, fire は全て *red* の色調をもつと捉えられているとしても、vehicle によって強意直喩表現の印象は異なるはずである。なぜ印象の異なる喩えを用いるかはそれぞれの用例を確かめなければならない。

---

[3] 以下の N2 は下記の形で使用される。2-25: ace of spade, 4-8 : robin's egg, 4-35: window cleaner, 4-37: gas flame, 5-14: growing corn ,6-17: frog belly, 6-23: spun gold

[4] 3. red, 4.blue, 5. green の項目に所有代名詞があるが、"He also had red hair, red as mine, and freckles over most of his face."のように身体部位の様子を比較する際に用いられている。ちなみに、5. green のみ検索方法が他の色彩語と異なり、名詞に限定した。その場合検索結果に所有代名詞は現れないため、5. green の mine は後から追加したものである。mine の順位が空欄となっているのはそのためである。

表 2

1. white			2. black			3. red		
1	SNOW	112	1	NIGHT	94	1	BLOOD	52
2	SHEET	100	2	COAL	40	2	HAIR	16
3	GHOST	53	3	PITCH	24	3	FIRE	15
5	BONE	22	4	INK	20	4	BEET	14
6	PAPER	15	5	MIDNIGHT	18	5	ROSES	6
7	CHALK	18	6	HAIR	14	8	SUN	6
8	MILK	15	7	TAR	13	9	LOBSTER	7
9	MOON	13	8	DEATH	9	10	APPLE	6
10	LIGHT	2	9	EBONY	10	11	RUBIES	5
11	MARBLE	10	10	RAVEN	11	14	CHERRIES	5
12	HAIR	5	13	SOUL	7	15	CRIMSON	1
13	COTTON	7	14	HELL	8	16	FLAME	3
15	CLOUDS	7	15	EYES	4	17	TOMATO	5
17	CREAM	4	17	PIT	3	18	SUNSET	4
19	ICE	6	18	SKY	10	19	BEETROOT	4
21	MOONLIGHT	4	20	OBSIDIAN	9	21	DEVIL	3
22	LILY	4	21	SIN	9	22	LIPS	3
23	SUGAR	6	22	SACKCLOTH	1	23	WINE	4
24	ALABASTER	5	23	SOOT	8	26	MINE	4
25	PEARLS	5	25	ACE	7	27	HELL	3

4. blue			5. green			6. yellow		
1	SKY	47	1	GRASS	18	2	BUTTER	4
2	SEA	12	4	SEA	5	3	SUN	2
3	EYES	10	5	GLASS	5	5	CHEESE	2
6	ICE	8	6	EMERALDS	4	8	DAFFODIL	2
8	EGG	8	7	MOSS	4	9	BUTTERCUP	2
10	HEAVEN	7	8	APPLES	4	11	PARCHMENT	2
12	LAKE	4	9	OCEAN	3	12	MUSTARD	2
14	MEDITERRANEAN	4	10	LEAVES	4	13	WAX	2
18	ATLANTIC	3	11	GOURD	2	14	BANANA	2
20	OCEAN	3	12	SPRINGTIME	1	15	CHICK	2
25	FORGET-ME-NOTS	2	14	CORN	3	16	SUNSHINE	2
27	SAPPHIRES	2	15	WAVES	1	17	BELLY	1
29	PLUMS	2		MINE	2	18	GRASS	2
30	MARBLES	2	18	SHAMROCK	2	19	FLOWERS	1
33	LAGOON	2	20	LAWNS	2	22	LEAVES	1
35	CLEANER	2	21	DÉCOR	1	23	GOLD	1
36	INK	2	22	JADE	2	31	BIRDSEED	1
37	FLAME	2	23	MEADOW	2	34	CURDS	1
40	HERS	2	24	SPINACH	2	35	CANARIES	1
42	SHADOWS	2	28	FOREST	1	39	BUTTERSCOTCH	1

4.2 N1、文脈と N2 の関係

前節では 6 色の強意直喩の N2 に使用される言葉を概観した。個々の強意直喩には一般的に形容詞—本研究では色彩語—を強調して伝えるという点が共通しているが、N2 には様々な語彙が使用され、これにより多様な印象を生むことができる。強意直喩を用いる際は、使用者がその多様な印象を効果的に利用してそれぞれの表現を使い分けていると考えられるが、その特定の印象を伝える意図には、N1 と N2 のつながりが関わっていると言える。つまり、N1 が肯定的と捉えられるなら、それは肯定的な印象を与える N2 に喩えられることになる。N1 が否定的に捉えられる場合も同じである。Moon (2008) は N2 と形容詞のつながりから生まれる効果を指摘している(*ibid.* 9)。しかし tenor も、vehicle と形容詞と相互に作用するはずである。4.2 節では N1 と文脈を明らかにしながら、色彩語を含む強意直喩の vehicle の違いを明らかにしていく。分析した結果、用例に肯定もしくは否定の使用傾向が分かりやすく表れているのは以下の表現であった。

表 3

肯定的	否定的
white as alabaster/ pearls/ cream	*white as sheet/ ghost/ marble*
black as ebony/ raven	*black as death*
red as cherries	*red as beet(root)/ lobster*
blue as sky/ heaven/ sea/ lake/ Mediterranean/ Atlantic/ ocean / lagoon	*blue as plums*
green as grass/ moss / meadow	*green as glass/ grass/ moss/ corn/ lawn*
yellow: なし	*yellow as (various nouns)*

紙幅の関係で全ての例を取り上げることはできないが、以下にいくつか用例を挙げ、文脈、N1 と N2 のつながりを確認したい。

●*White as marble*

用例数は 10 例であり、うち 9 例の N1 は身体部位である。この直喩は、身体の白さと冷たさの両方を伝える。

(3) The fever faded but left behind a child with eyes dark against a pale face and skin that no longer blushed with life but was **white as marble**.

(3)での身体部位の所有者は亡くなっている。大理石も死体も白く冷たいという点が共通している。*white as marble* は死や体調不良の文脈で用いられるため否定的な使用と言える。比喩表現 "a heart of marble"「冷たい心」[5]からも、大理石はその冷たさという点に注目されているのが分かる。

○*White as alabaster*

COCA には *white as alabaster* の用例が 5 つ見られ、N1 は肌、歯、彫像であった。(4)は N1 が歯の例である。

(4) Handsome, his blond hair neatly side-combed, his face fresh and confidant, his teeth as **white as alabaster**.

White as alabaster は *white as marble* と違い美しさを表し、(4)以外の例では "beauty", "handsome", "finely" などの肯定的な言葉が見られる。alabaster が彫刻の材料として使用され、芸術作品が美しいものであるという認識が影響していると考えられる。

[5] 『ジーニアス英和大辞典』参照。

●*Black as death*

用例数は 9 例であるが、うち 3 例は映画版 *Hamlet* の一節である。本研究は現代英語を分析対象にしているためこの 3 例は除外した。残りの 6 例の N1 は"hair", "a dog", " the sky", "a tattoo", "water", "darkness in a tunnel" など様々である。(5)の N1 は"pistol" である。

(5) " …you do what I say or I'll kill you..." I guess he was talking about the pistol. All I could tell you was that it was massive, squared-off, and **black** **as** **death**.

(5)は語り手が" I'll kill you."と脅されていること、ピストルが死に至らしめる道具であることなど、*death* の概念が文脈中に存在している。(5)以外の *black as death* が含まれる例も同様に、自殺の話題や殺意が湧く場面など死に関係する文脈である。

○*Black as raven*

COCA での用例数は 11 であり、いくつかは"raven's feathers", "raven's wing(s)", "raven's sheen"の形で N2 に現れた。N1 は人間の髪や馬の毛である。"stylishly"、"sensually"、 "shining" などの言葉が文脈中に見られ、肯定的な使用の直喩と言える。

(6) Nazi's hair, stylishly cut, was as **black** **as** a **raven**'s feathers. She had a dimpled square chin and full lips, just like her handsome father, and her beautiful almond eyes …

●*Red as lobster*

COCA での頻度は 7 で、その全ての用例の N1 が人間の肌である。

(7) Didn't I tell you you were getting too much sun? Look at you, you're **red** **as** a **lobster**.

Red as lobster の表現が現れる文脈では、肌が赤くなる原因が示されており、(7)のように日焼けのほか入浴の行為もあり、これらがロブスターの調理される様と重なる。加えて、飲み過ぎが紅潮の理由となっている例もあるが、これには *lobster* のもつ「まぬけ」[6]の比喩義が関係していると考えられる。飲み過ぎや日焼けのし過ぎなどは行為者の不注意によって起こるものである。

○*Red as cherries*

用例数は 5 つで、N1 は頬、唇、ルビー、目が 1 例ずつ、頬が 2 例である。(8)の"gorgeous"のほか、"laugh", "elite"などの肯定的な語がこの強意直喩の周りに現れた。

(8) Their hair hung down in dark curls and their lips were **red** **as** **cherries**. They were the most gorgeous girls Margaret had ever seen in her life.

cherry は陽気さ、純潔、豊穣の象徴[7]であり、これらのポジティブなイメージが、用例の美しい唇と結びついていると言える。

○*Blue as sea/ lake/ Mediterranean/ Atlantic/ ocean / lagoon*

blue を含む強意直喩表現で、*sea, lake, Mediterranean, Atlantic, ocean, lagoon* が N2 である用例を合計すると 28 例となり、うち N1 が"eyes"である例は 20 見られた。これらは N1 の目の美しさに対する褒め言葉である。(9)の N2 は *Mediterranean* であり、夏の海は良い印象を与えるものであることを示している。

(9) Rose, has anyone ever told you your eyes are as **blue** **as** the **Mediterranean** in summer? ... Or that your lips are as luscious as red raspberries in fall?

○*Blue as sky/ heaven*

澄んだ青い目への賞賛は *blue as sky/ heaven* に例があり、全用例中の約半分を占める。夏の海と同じように夏の空も美しいものと認識されているのが分かる。

(10) Asa's eyes were as **blue** **as** the sweet summer **sky** and often reflected the distant thoughts of the poet he tried to keep hidden.

---

[6] *OED*、『ジーニアス英和大辞典』参照。

[7] 『ジーニアス英和大辞典』参照。

晴天は海を鮮やかに見せるので、夏の海と空は美しさの点でかなり近い印象で捉えられている可能性がある。“blue as the sea and sky”というフレーズが COCA に見られるので、青い海と空は対として認識されていると言える。英語には空の青から生まれた色名が多くあり(福田 2017:249)、sky-blue、horizon-blue、cerulean-blue、azure-blue などが挙げられる。このように空の色を色名にするのは、「「神います天空」を崇める宗教感情をもつ民族に見られる」と福田(2017)は述べている。

○*Green as grass / moss/ meadow*

blue と同様に、*green as grass/ moss/ meadow* は主に目の虹彩の美しさを讃える表現である。(11)は *green as grass* の例である。

(11) She had the most beautiful green eyes I'd ever seen. **Green** **as** spring **grass**.

肯定的文脈の *green as grass/ moss/ meadow* は”spring”, “springtime”の語と共起する。春の植物の緑が最も美しい緑だという考えから(11)のような表現が生まれると考えられる。[8]

●*Green as grass/ moss/ corn/ lawn*

green には“immature, raw, untrained, inexperienced.”の比喩義がある(*OED*)。*green* を含む強意直喩表現がこの意味をもっている時、N1 は全て人間で N2 は全て植物である。植物は成長する特徴があるが、未熟な人もまた成長の途中である。その類似点から生まれた直喩と言える。(12)は *green as moss* の例である。

(12) He's a buck private **green** **as** creek **moss** who just followed orders, factory-like,...

●*Yellow as (various nouns)*

Yellow の強意直喩はその色彩語の比喩義“Of a person, his or her eyes, complexion, etc.: of an unhealthy yellowish colour, typically as a result of old age or disease.” “lacking in courage; faint-hearted; cowardly.” (*OED*)を強く反映して、否定的な使用傾向が観察できる。(13)は病気によって顔色が黄ばんでいる様子である。

(13) All my babies had jaundice,' and when I flipped back the covers, there was this baby as **yellow** **as** a **banana** from a liver infection.

(14)は臆病さを示す例である。

(14) Rainey's a repeat deserter, **yellow** **as** **butter**.

その他の例の N1 は死体や歯が見られた。このようなネガティブな使用には、上記の *banana, butter* の他に *buttercup, mustard, wax, birdseed* などが N2 に選ばれているが、色調以外にどのような特徴を N1 と共有しているのか不明であるため、選択の理由は把握できていない。

4.3 分析のまとめ

ここまで、N1、文脈と N2 の関係について用例をいくつか示しながら分析してきた。*black* は死, *green* は未熟、 *yellow* は顔色の悪さや臆病などの、色彩語の比喩義に影響されている否定的な文脈が、データの中に見られた。その一方で、色彩語の比喩義が強意直喩表現になると消失する例もあった。*White as marble* は *white* の純粋というポジティブなイメージとは反対の否定的な表現である。*Black* は邪悪や絶望を表すが(加えて *raven* も不吉な鳥である[9])、*black as raven* は美しい髪に用いられる。”Green-eyed” は嫉妬を意味するが、*eyes green as grass* は魅力的な目であることを表す。*blue* は憂鬱の意味があるが、*eyes blue as the sea* は褒め言葉である。このように色彩語の比喩義が失われることが示唆するのは、色そのものが与える印象と物体の色が与えるそれは異なるということである。後者は人間の価値判断や習慣、感覚によって形成されたものであり、これらは比喩表現において生かされている。そして肯定的/否定的に捉えられる N1 は肯定的/否定的に捉

[8] 18 世紀から spring green という色名があり、これは 5 月の草木の美しい緑を指す(福田 1998:79)。

[9] 『ランダムハウス英和大辞典 第 2 版』、福田(2017: 266)参照。

えられている N2 を引き寄せる。個々の N2 は、N1 と文脈に合う特徴と性質を有しており、これが vehicle として選ばれる根拠となると言える。

5. 議論

4 節では文脈が肯定的あるいは否定的だと判断できる例を挙げ、N1 と N2 のつながりを確認したが、肯定にも否定にも分類できない用例もある。判別しにくい用例とはつまり N2 の印象が弱いものであるが、何故弱まってしまうのかを本節で議論する。

原因として考えられるのは、まず、慣用化の影響である。強意直喩表現は何世紀も形が変わっていないものがあり(e.g., *white as snow, brown as berry*)、cliché となってしまったものがある。繰り返し使用され、強意直喩が一つの語彙として認識されると、直喩の形容詞が中心的な意味になる代わりに、N2 の印象が弱まる。また、先行研究でも指摘されているが、強意直喩表現は頭韻や母音韻を踏む特徴があり(e.g., *good as gold, drunk as a skunk*)、これも慣用化を促す要因である(Svartengren 1918: 456, Moon 2008:5)。

N2 の印象を薄めるもう一つの要因は、強意直喩の修辞的使用である。4 節で挙げた直喩は、N2 のもつ比喩義や象徴的な意味が反映されることで、肯定と否定のどちらかに分類できる例が多い。しかし、修辞的に使用されることで肯定/否定の判断が難しくなる場合がある。レトリックは主に以下 4 つのパターン–対比、同一属性、作中参照、質感の類似–が見られた。それぞれのレトリックを以下に例示する。

①対比

色彩語を含む強意直喩表現の対比には、(15)のような例がある。

(15) The springtime sun is as **yellow** **as** a **daffodil** floating in a sea of blue.

強意直喩表現の対比において、比べられるのは色だけではなく、N2 の特徴をも含め様々に対比をなす。(15)では *yellow* と"blue"と共に、空と海を対立させている。小説で外見特徴や情景を説明する場面で、2 つ以上の色彩が使用されることは一般的によく見られる。複数の色彩語があることで、作家は対比のレトリックを使おうという考えをもつのだろう。

② 同一属性

複数の比喩表現を一場面中に用いる際に、同一カテゴリーに属するもので vehicle を揃えるレトリックである。(16)では 3 つの色を挙げ、それぞれの tenor を宝石に喩えている。

(16) Ragnar, a humble but content fisherman, hooks a fish with " scales like sapphires, eyes **green** **as** **emeralds**, and ruby red lips. "

③ 作中参照

強意直喩表現には、作中に出現するものに影響を受けて、それを N2 に使用するというパターンがある。(17)では、vehicle が登場人物の庭に咲いている花である。

(17) A dainty wee lassie she was, in her homespun frock with the baby flush in her cheeks and her eyes as truly **blue as** the **forget-me-nots** peeping at her from the garden grass.

④ 質感の類似

N1 は同様の色と質感をもつものに頻繁に喩えられ、(18)のような例がある。

(18) I'd made her some coffee the way she liked it: **black** **as** **tar**,…,

(18)は N1 の"coffee"と N2 の *tar* の質感が実際に近いというわけではなく、かなり強調しているが、*tar* の thickness という特徴を利用して"coffee" の濃さを効果的に伝えている。

この 4 パターンは必ずしも N2 の印象を弱めるものではなく、むしろ強めることがある。4.2 節に提示した例にもこのレトリックは使われており、また、(17)は "dainty"という言葉から、はっきりと肯定的な文章だと判断できる。重なり合うのは、レトリックを使用した場合も 4.2 節の例と同様に、人間の知覚や習慣が影響していることを示している。また、これらの修辞的使用の例の方が、人間の五感やカテゴリーといった基本的な経験が強く表れていると言える。

6. まとめと課題

本稿では色彩語を含む強意直喩表現の N2 の語彙について、どのような違いがあり、どのように N2 の言葉を使い分けるのかという問いを立て、先行研究で軽視されていた N1 と文脈に着目して考察をした。N2 には、人間の文化や習慣によって作られた様々な印象があり、そこからさらに比喩義や象徴が生まれることもある。使用者が N1 をどう捉えるかによって、その N1 や文脈に最もよく合致する印象をもつ言葉を vehicle に選ぶと考えられる。また、特に修辞的使用においては、人間の基本的な感覚や経験を反映した表現となる。強意直喩表現の主な意味は形容詞、本研究では色彩語であるが、色だけではなく様々な要素を比較した上で N2 は選ばれる。この比較は N1 と文脈、N2 が結びついていることを示唆する。

最後に、研究の課題を 3 つ指摘する。まず 1 つ目に、分析において通時的視点が欠如していることである。慣用化すると N2 の効果が薄まることを指摘したが、どの N2 にそれが生じているのかを確認していない。2 つ目に、肯定・否定に分類した例には、用例数が少ないものがあるので、確実な使用傾向とは言えない。また、強意直喩は文学作品に多用されるという性質上、文脈を肯定・否定のどちらかに二分するのは限界がある。3 つ目は、yellow を含む否定的な表現 についてである。病気によって顔色が悪い様、歯が黄色い様子、臆病さなどを表す傾向があるものの、N2 がどのように選択されるのかは把握できなかったため、vehicle の相違を明らかにする必要がある。

謝辞

本稿は、筆者が 2021 年 1 月に大阪大学大学院言語文化研究科に提出した修士論文 *An Analysis of Intensifying Similes with Color Adjectives in English — The Relation between Context and Vehicle —* の一部を抜粋、修正をしたものである。論文の執筆にあたり、大森文子教授、渡辺秀樹教授からは多くのご指導をいただきました。また、同大学院とコーパス研究会の先生方と学生の皆様も、たくさんのご助言・ご指摘をくださいました。感謝申し上げます。

参考文献

Berlin, B. & P. Kay. (1969). *Basic Color Terms, their universality and evolution*. Berkley: University of California Press.

Biggam, C.P. (2015). 'English colour terms: A case study', in C. Kay and K. Allan (ed.), *English Historical Semantics*, Edinburgh: Edinburgh University Press Ltd, 113 – 131.

Carter, R. (2004). *Language and Creativity: The Art of Common Talk*. London: Routledge.

Hutchings, J. (2004). "Colour in folklore and tradition−The principles", *Color Research & Application*, 29(1), 57-66.

Lakoff, G. & M. Johnson. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, G.& M. Turner. (1989). *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor.* Chicago: The University of Chicago Press.

Lindquist, H. (2009). *Corpus linguistics and the description of English*. Edinburgh: Edinburgh University Press. (渡辺秀樹・大森文子・加野まきみ・小塚良孝訳(2016).『英語コーパスを活用した言語研究』. 東京：大修館書店.)

Moon, R. (2008). "Conventionalized as-similes in English: A problem case", *International Journal of Corpus Linguistics*, 13(1), 3-37.

Mylonas, D. & L. MacDonald. (2016). "Augmenting Basic Colour Terms in English," *Color Research and Application,* 41, 32-42.

Novoselec, Z., & J. Parizoska. (2012). 'A corpus-based study of similes and cognate adjectival forms in English, Swedish and Croatian', in A. P. Bertrán, J. M. P. Bretaña, and L. L. Nadal (ed.), *Phraseology and Discourse: Cross Linguistics and Corpus-based Approaches*, Baltmannsweiler : Schneider Verlag Hohengehren, 101-110.

Richards, I. A. (1936). *The Philosophy of Rhetoric*. Oxford: Oxford University Press.

Svartengren, T. H. (1918). *Intensifying Similes in English.* Lund: Gleerupska.

Tartakovsky, R., Fishelov, D., & Shen, Y. (2019). “Not as clear as day: On irony, humor, and poeticity in the closed simile,” *Metaphor and Symbol*, 34(3), 185-196.
Wierzbicka, A. (1990). “The meaning of color terms: semantics, culture, and cognition,” *Cognitive Linguistics* 1-1, 99-150.
Wyler, S. (1992). *Colour and Language: Colour Terms in English.* Tübingen: Gunter Narr Verlag Tübingen.
上村和美. (1999). 『文学作品にみる色彩表現分析-芥川龍之介作品への適用』. 東京: 双文社出版
小原真子. (2016) .「英語の色彩語について ： コーパスのデータを中心に」.『島大言語文化 ： 島根大学法文学部紀要』第 41 号, 47-64.
坂本真樹. (2007). 「色彩語メタファーへの認知言語学的関心に基づくアプローチの検討」. 『メタファー研究の最前線』. 東京：ひつじ書房.
須賀川誠三. (1999). 『英語色彩語の意味と比喩—歴史的研究』. 東京：成美堂.
瀬戸賢一. (1997). 『認識のレトリック』. 東京：海鳴社.
新妻明子. (2013) 「心的状態を表す英語の色彩語メタファー ： 認知意味論に基づく意味拡張のプロセス」『常葉大学短期大学部紀要』第 44 号, 47-62.
橋本邦彦. (2004).「シミリーと関連性から見た伝達機能 」.『認知科学研究』第 2 号, 36- 58.
福田邦夫 . (1994). 『ヨーロッパの伝統色—色の小辞典』.東京：読売新聞社.
— . (1999). 『色の名前はどこからきたか—その意味と文化』 東京：青娥書房.
— . (2017). 『色の名前事典 507 』. 東京：主婦の友社.

辞書・コーパス
『ジーニアス英和大辞典』 KONISHI Tomoshichi, MINAMIDE Kosei and Taishukan, 2001 -2011
『ランダムハウス英和大辞典 第 2 版』 Shogakukan Inc., 1973,1994, and Random House, 1987.
Oxford English Dictionary. Oxford University Press, 2020. (https://www.oed.com)
Corpus of Contemporary American English. (http://corpus.byu.edu/coca/)